

「Netherlands-Germany Field Research Trip 参加報告書」

京都大学経済学研究科 修士2回生 平岡由美子

有機農法の農場の訪問では、野菜の栽培、ソーセージ、肉の加工を見学するという、日本でも経験したことのない貴重な経験を得ることができた。見学した農場では、スパイスもオーガニックのものが使われ、長期間かけて育成した豚を用い、大規模精肉工業とは違い、時間をかけて作られているそうである。また、雇用されている労働者には、元アル中、薬中、ホームレスの人もかなりいるそうであり、社会的な接点をつくる、という意味でも意義がある、と感じた。

オランダでは都市部も田舎も水辺の光景で日本との差を感じた。川にしても小運河にしても、天井川であり、また、路面から10cmほどの、高い位置に水面がある場合もあり、簡単に氾濫しそうである。ガードレールはほとんどなく、洪水対策と通行人やドライバーの安全対策はどのように工夫されているのか、不思議に感じた。

また、オランダでは、都市部においても、舗装されないままの土壌の%が日本と比較してかなり高い印象を受けた。これは、雨水を無駄にせず、地下に浸透させる必要性が認識されているのも一因であろうか。生物の生育環境を考えても望ましいので、日本の都市部でも、最近増えつつある透水性の舗装以外に、完全に非舗装の土壌面積を増やすことが考えられてもよいのでは、と感じた。「水利用」には関心があるので、帰国後、オランダの事情について調べてみようと思った。

ハイデルベルク大学の図書館で、古い解剖学の蔵書やスケッチを見る機会をえた。今日のハイデルベルク大学医学部の前身のひとつである解剖学研究所は1805年に創設されたのであるが、カメラもコピーも無い時代に緻密に正確に人体の構造を血管や筋肉の末端の細部に至るまで肉筆で写そうと努力した人々がいたことがスケッチからうかがえ、頭が下がる思いであった。

International student workshopでは、興味深い報告を多数聞かせていただいた。報告、質疑応答は早口になれば聞き取れないものがあり、自分の語学力の無さを痛感した。今後真剣に英語をマスターしなければならない、と感じた。今回、自身のプレゼンテーションの機会を与えていただいた。準備をしたものの、原稿が手放せない状態であったので、出席者の顔を見ながら報告できるレベルにまでならなければいけない、と感じた。また、語学力よりも先に、報告すべき内容がしっかりしたものでなければならぬのは当然のことである。

NGOのFIAN(foodfirst information action network)では、多くの国々でのFIANの活動について個別の報告を聞かせていただいた。例えば、ウガンダ、ブルキナファソ、メキシコといった普段なじみではない国々での人々のくらしや経済的発展に関わる諸問題についての講義をお聞きし、有意義であった。

個人ではアクセスできない貴重な場に種々連れて行っていただき、勉強させていただき、大変充実し、かつ楽しい旅行であった。引率の先生方を含め、準備にお手間と時間をかけていただいた関係者の皆様すべてのおかげであり、深くお礼申し上げたい。